

古代神の  
目覚め

藤田泰彦

青山ライフ出版



## 目次

養沢	七
会合	二三
縄文人との邂逅	四三
古代神	五五
縄文人の神	六三
それぞれの幸福	七三
縄文人との別れを想う	九一
ヴィイシヌと徳三の協奏曲	九七
再び養沢にて	一〇九

装帧——江尻智行  
装画——降矢勝也

古代神の目覚め

---



## 養沢

高く覆う大樹が古の社を幾層にも暗く深くどこまでも彩なし染めている。

\*

私と杉原さんは田無駅の南口で待ち合わせ、彼の車で都下の養沢神社へと向かう。車は某メーカーの軽だが、宙を飛び廻るカナブンのようによく走り動く。私たちは武藏五日市駅の前で一旦降りて近くの喫茶店でコーヒーを飲み、それから養沢という神社に赴く。

その養沢神社の鳥居を潜って、まず一対の灰色の龍が左右で坐す手前の石の段を上り、そこから社殿の方にと向かう。この境内では実に太く大きな柄の樹が聳えている。樹齢四百年はあるか。短めの参道の左手には、公民館と社務所を兼ねる小さな建物があり、社殿のほかに右側では小さな赤い鳥居のある稻荷明神が祀られていて、さらに山際の斜面の始まりの辺りに、それこそ名も定かではない神靈を祀る祠もある。あれが杉原さんのいう古代神の棲家なのか。

私、藤川靖久と杉原基幸は共にある道教系の宗教団体のメンバーだが、今年の春頃から以前

から関心があつた古代神の靈威を感じ取りたいと思い、五月も終わり近い今日、二人でここ都下の養沢神社に来たのだった。

養沢神社の拝殿で二拝二拍手一拝をし、赤い鳥居を建てた稻荷明神の社にも真言を唱え、それから小振りな石灯籠の方に行き二拝をして拍手を打ち、私はおもむろに祝詞を奏上する。杉原さんはこういう古神道の儀礼にはご自身の専門のヨーガほど詳しくはないので、私にまかせ切つてている。私たちは太古、古代からの精霊、神靈を目覚めさせ、それを祀り、できれば自分たちや、ほかの人々の幸福にも役立てたいと思うのであつた。もともと『記紀』でいわれている神々は結局、当時の権力者の都合によって作り上げられたものであつて、本来の土着の神靈はまた別のものであると思われる。土着の神々、それはそれこそ縄文期からずっとわが国の山や森や川や海にも息づき、二十一世紀の現在でも自然の中に棲んでいる精霊、あるいは神靈でもあると。私たちは、何とかその神靈を祀る小規模の社でも建てて、社会に良い波動を送つてゆきたいと考えてもいるのだが。

私と杉原さんは一通りの参拝を終え、また一緒に帰途につく。

中野区内にある自分の一軒家に戻れば、安普請やすぶしづでは二匹の猫科のやつらがしつかり待つてゐる。一匹はごく普通のトラ模様の猫だが、もう一匹は三年前に、知り合いのインドネシア人か

ら貰った野生の猫のスナドリ猫である。一般的にいって山猫の方が性格は激しいはずなのだが、うちの二匹の場合はイエ猫の徳三とくざうの方が荒々しく、野生のヴィシュヌは内気である。めったに来ないが、近所の自治会の幹部の島谷しまなにさんが顔を出したりすると、ヴィシュヌはあわて氣味にすぐに奥に引っ込んでしまう。一方、徳三は機嫌が悪いときは仁王立ちになり、口を実に大きく開けて威嚇までする。ガフーッ、と。でも、まあ、猫同士は仲がいいのだから、自分の生活は上手くいってもいるのだが。

私の借りている大分古い小さな一軒家の居間兼書斎には、かなりの量の本がある。文芸書もあるが、大体が神秘学や宗教の学術書である。そこでは小型の簡易神棚が祀られ、ほかに弁財天や觀世音菩薩の小さな像も置いてある。

私は日本やアジアの神々、精靈を敬い一日を始める。

仕事は園芸関係の業界雑誌の編集である。だが、私はそれほど植物が好きな訳ではなく、庭も狭いので特に何かを植えたりはせず、部屋の中には数種のエアープランツなどを置いているのだが、数年前にその砂漠の植物を扱いだした頃には水のやりすぎで死なせてしまうという愚行を繰り返してもしまったが、ここ一、二年はさすがに程良い水加減が分かるようになつた。植物はほかにもトランオを、これは近所の花屋さんから貰つたものだが、部屋の隅に置いてあ

る。それ以外には秩父駅前や奥多摩で買った同地の植物の鉢植えなどがある。

まあ、本年五十の自分はシングル・ライフを程々は楽しんでもいるのだが。いや、そうせざるを得ないとでもいうか。身内は父親が大分昔に亡くなっているし、八十年代も後半の母は東北の姉のところでずっと暮らしている。友人に関しては、所属する宗教団体の人たちもそうだが、何しる同じ町に二十四年も住み、いな、棲み続けてもいるので商店街の自営業の人たちや、何人かのお坊さんや神主さんとも顔馴染みである。そんなことから、自分は今飼っている二匹の猫らと上手く残りの人生を終えられれば、それでいいのであるが。

もともと私は能天気の極楽トンボ的な性格なんで、あんまり物事を深刻には考えないところがあった。だが一方では、死後の世界、輪廻転生とか靈界とかにも関心があり、その方面の本も随分読み、ここ数年は仏教専門誌に寄稿したりホラー系の文芸雑誌のコンテストに応募したりもしている。が、佳作までにも至らず、一度だけ末席というか選外努力賞をやっと頂いたくらいである。

友人の杉原さんは七十年代だが、ヨーガの導師で、ヨーガの会を主催して都内の公民館などで教室を開いている。だが、道場や著作があるわけでもないので最晩年のここで、もうひと飛躍したいと考えてもいて、共に独り者であるから、所属している台湾人中心の道教系の団体の中

でもお互いに親近感が強く、そんなことから月一回の定例の学習会以外にも都下の神社やお寺などに一緒に赴いたりもする間柄である。

そんな彼が言うには、縄文時代の神、あの民俗学の泰斗の柳田国男も究明できなかつたといふ「みちのくの謎の神アラハバキ」と関連があるとも言われている都下の養沢神社にこれまで何度も行き、とりわけそれが祀られているらしい小さな石灯籠で彼なりに祈願をしてきたのだと。

養沢神社は祭神があまり明確ではないのだが、古代の神「アラハバキ」がそれであるとも考えられているのであるが。思えば、『記紀』でいう天之御中主神やイザナギやアマテラスなどが位置付けられる以前の太古の旧石器時代の精靈がずっと名を冠せられることもなく、この地の人々に敬い祀られてきたと予想もできるのだが。もっとも、こういう類いの祭神が定かでない神社は京都などでは結構あるらしいが。

今日自分が初めて行つたその養沢神社の境内で、杉原さんが、「ところで、実はこの前少し話した件だけど、うちの会員さんにも伝えておいた事がある程度は具体化したので、今度あなたに来てもらおうかと思うんだが」と言つた。

杉原さんはかなり昔に弱電気関係の商売をやっていて、その後独りでインドやネパールに行

き神秘体験を経て、五十年代になつてからはヨーロッパの教室を公民館や区の勤労福祉会館で開いている。一応今の仕事の方は順調ではあるが、古代の神靈を呼び起しそれを甦らせて祀ることなどを企図しているのだ。実際共に道教系のシャーマニズム色の濃い団体の信徒というのではなくが同調者でもあるので、ここで二人で協力して神秘学の研究会を主催して門人による小さな講を作ろうかと考えてもいるわけなのだが。もつとも、私にせよ杉原さんにせよ、本当に何を目的としているのか自分たちでもあまり分かっていないところもあるのかもしれないのだが。いずれにせよ彼と私は、古代の神々の靈威を現代に顕現させようと思っているのである。

考えてみれば今の二十一世紀は人々が新しい形態の宗教、あるいは教えを希求(ききゅう)しているのかもしれない。だから、混沌とした社会状況の中での、人々は宗教的なもの、あるいは靈的なものに走るのかもしないと感じる。特に機械文明が確立し切った現代では、加えて電子機器などの発達と普及で生活自体が充足している一方、五官で知覚している現実の生活を超えたもの、それが神や仏であつたりもするのだが、それらにわりと多くの男女が帰依したりもしている。

政党も持つてゐる日蓮宗を基調とした宗教団体「S学会」は、戦後かなりの発展を遂げた。人々が敗戦で困窮している時代に多くの信徒を得、それによつて著しく成長をした。また、その教団ほどではないが、神道や仏教を基礎として確立した団体も数多ある。歴史を考察してみると、